

参考2

馬の改良増殖をめぐる情勢

生産局畜産部畜産振興課

令和元年7月

農林水産省

目次

1. 馬の主な区分	1
2. 馬産をめぐる情勢	
(1) 飼養頭数の推移	2
【参考】我が国の馬の飼養区分	3
(2) 農用馬（重種馬）の飼養状況	4
【参考】農用馬（重種馬）の品種別登録状況	5
(3) 競走用馬（軽種馬）の飼養状況	6
(4) 乗用馬の飼養状況	7
(5) 日本在来馬の飼養状況	8
(6) 登録頭数の推移	9
(7) 馬肉関係	10
(8) 馬の流通概要	11
3. 改良をめぐる情勢	
(1) 馬の人工授精の状況について	12
【参考】馬の人工授精の状況について（技術講習会開催など）	13
(2) 農用馬（重種馬）・乗用馬の能力評価	14
【参考】競走用馬（軽種馬）の能力評価	15
【参考】スポーツホースの能力評価	16
(3) 乗用馬のニーズについて	17
4. 馬の改良増殖目標のうち数値目標の検証	
(1) 数値目標の変遷	18
(2) 現行の目標（第10次家畜改良増殖目標）に対する進捗状況	19
5. 優良事例	20

1. 馬の主な区分(品種・体型・用途・産地)

軽種馬



体型による区分

- ・品種: サラブレッド、アラブ、アングロアラブ、サラブレッド系種、アラブ系種
- ・血統登録機関: (公財)ジャパン・スタッドブック・インターナショナル
- ・主に競走用。

農用馬(重種馬)



- ・品種: ブルトン種、ペルシュロン種、日本挽系種など
- ・ばんえい競走、食肉用、祭事に用いられる。

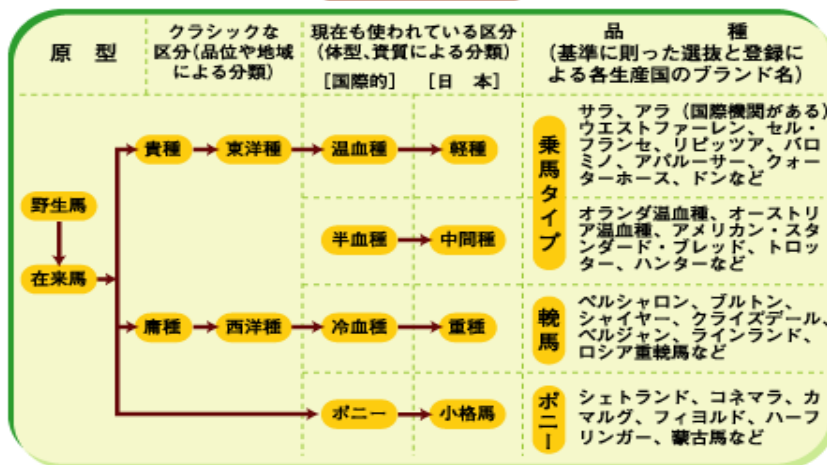
小格馬(ポニー)



- ・体高 148cm以下の馬の総称

※ 軽種馬以外の血統登録機関:
(公社)日本馬事協会

品種の成立経過



品種としての未固定の集団:
〇〇温血種、〇〇馬、〇〇重挽馬などと呼んでいる。

半血種: 本来は温血種と冷血種の交雑を指すが、最近は品種間交雑を意味している。

【参考】中央畜産会HP
(畜産ZOO館)

用途による区分

乗用馬

- ・あらゆる品種



肥育用馬

- ・ブルトン、ペルシュロン、日本日本挽系種など



産地による区分

日本在来馬

- ・8品種

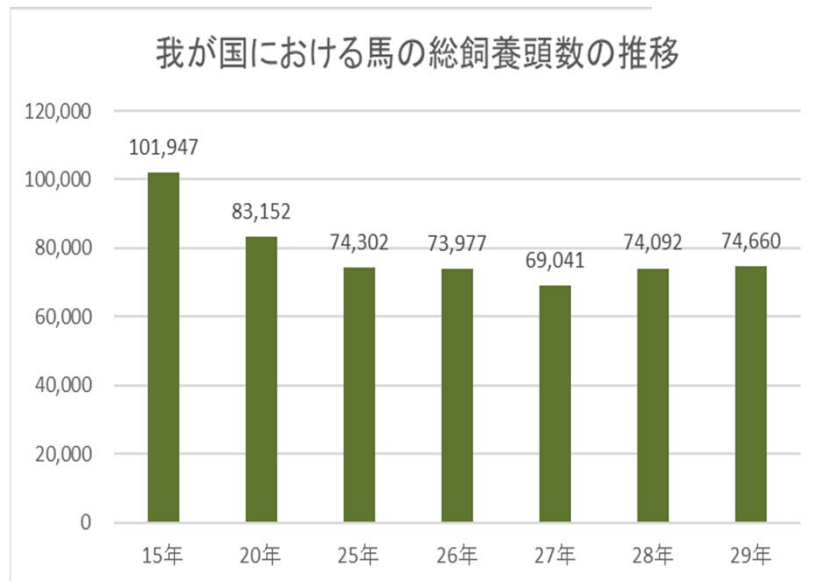


2. 馬産をめぐる情勢

(1) 飼養頭数の推移

- 馬の総飼養頭数については、減少傾向で推移しており、平成29年は約75,000頭。
- 農用馬（重種馬）については、継続的に減少傾向で推移してきたが、近年下げ止まりがみられ、平成29年に増頭し5,115頭。
- 競走用馬（軽種馬）の飼養頭数は、近年ほぼ横ばいで推移。

(単位:頭)



(単位:頭)

年次	競走用馬 (軽種馬)	農用馬 (重種馬)	小格馬	在来馬
15年	56,088	15,057	1,610	2,301
20年	45,299	8,888	1,178	1,860
25年	41,367	6,208	624	1,879
26年	40,794	5,880	672	1,817
27年	40,867	5,105	669	1,817
28年	41,120	5,052	625	1,749
29年	41,959	5,115	597	1,708

資料：競走用馬（軽種馬）：「軽種馬統計」（（公財）ジャパン・スタッドブック・インターナショナル（公社）日本軽種馬協会）
 農用馬（重種馬）・小格馬・在来馬：（公社）日本馬事協会調べ
 乗用馬・肥育馬：（公社）中央畜産会調べ（平成26年は参考値）
 平成25年以降の合計頭数：動物衛生課「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」

【参考】我が国の馬の飼養区分

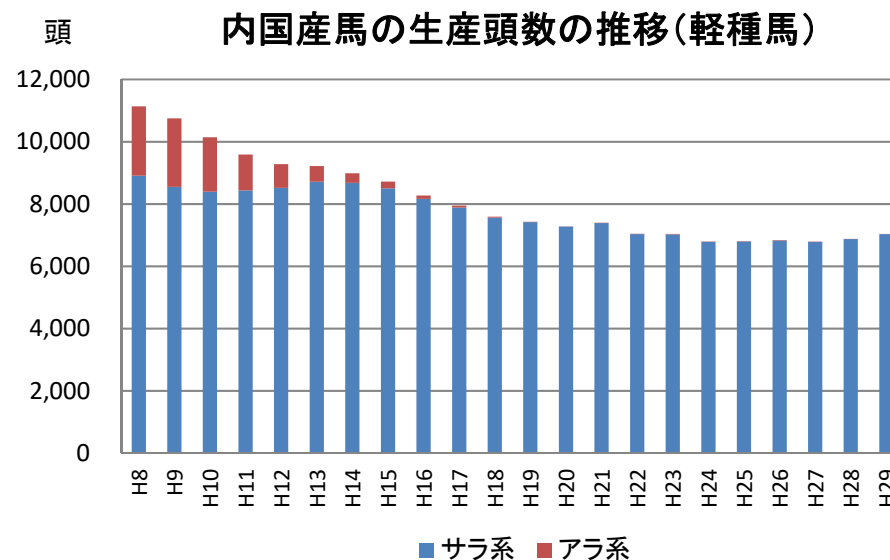
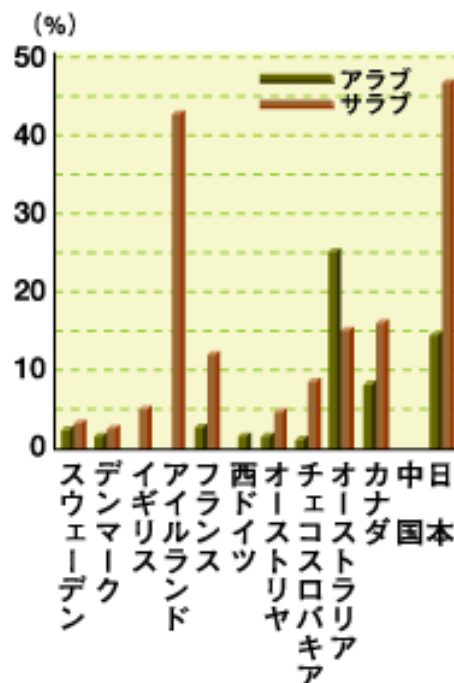
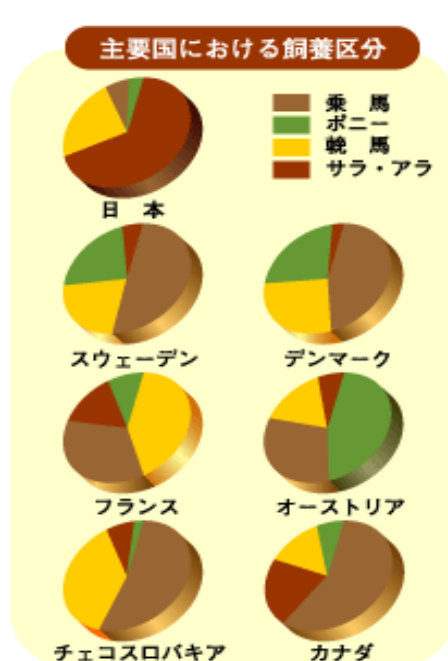
- 我が国の総飼養頭数に占める割合は軽種馬が最も大きく、競走用の軽種馬が主体。
- 我が国においては、中央競馬は平成7年、地方競馬は平成21年度をもってアラブ系の競走は廃止されており、軽種馬の生産品種は主にサラブレッドとなっている。

主要国のサラブレッドの生産頭数と馬の飼養頭数(2016年)

	フランス	イギリス	アイルランド	アメリカ	アルゼンチン	オーストラリア	日本
生産頭数(頭)	5,305	4,663	9,381	20,850	7,405	12,653	6,905
生産頭数割合(%)	(1.4)	(1.1)	(10.2)	(0.2)	(0.3)	(4.7)	(9.3)
飼養頭数(千頭)	380	418	92	10,526	2,448	269	74

資料:(生産頭数)(公財)ジャパン・スタッドブック・インターナショナル調べ、

(飼養頭数)FAO STAT(2018年3月時点)※日本の飼養頭数は消費安全局動物衛生課調べ「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」



資料:(公財)ジャパン・スタッドブック・インターナショナル、(公社)日本軽種馬協会
「2018軽種馬統計」

【参考】中央畜産会HP(畜産ZOO館)

(2) 農用馬（重種馬）の飼養状況

○ 繁殖供用種馬及び育成馬は、平成29年には前年を上回った。

(単位:頭)

年次	繁殖供用種馬		育成馬		競走馬 (ばんえい)	国内合計	輸入 繁殖用♂
	種雄馬	種付雌馬	当歳馬	1歳馬			
平成5年	546	11,780	7,479	6,679	1,633	28,117	0
10年	402	8,522	5,240	6,276	1,772	22,212	4
15年	397	5,895	3,730	3,711	1,324	15,057	0
20年	246	3,607	1,890	2,040	1,105	8,888	0
25年	232	2,367	1,378	1,364	867	6,208	0
26年	233	2,300	1,272	1,309	766	5,880	0
27年	184	1,896	1,101	1,208	716	5,105	0
28年	200	1,956	1,120	1,046	730	5,052	0
29年	205	1,989	1,136	1,064	721	5,115	3

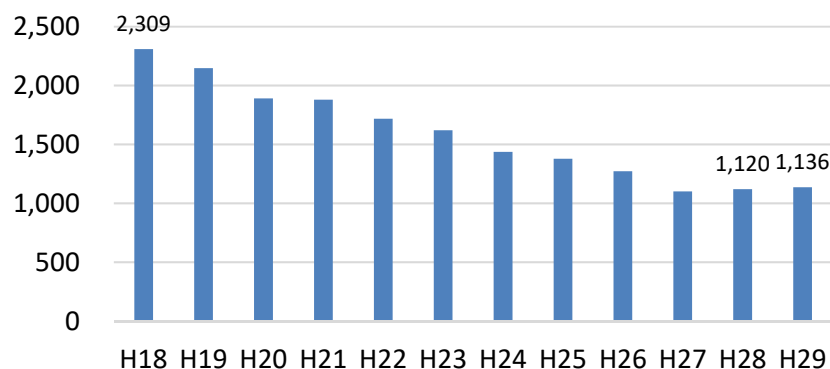
資料: 1. 繁殖供用種馬、当歳馬は(公社)日本馬事協会調べ

2. 育成馬の1歳馬は前年の生産頭数(当歳馬)に0.95を乗じた推定頭数

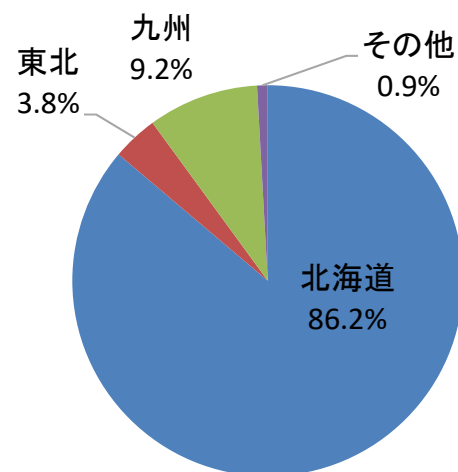
3. 競走馬は地方競馬全国協会「登録馬主及び登録馬に関する統計資料」

4. 輸入頭数は畜産振興課調べ。平成23年輸入頭数: 2頭

農用馬の出生頭数の推移



農用馬(重種馬)の
地域別出生頭数割合(H29)



ペルシュロン種
体高が170cm程度、体重
800～1,100kgの大型馬。

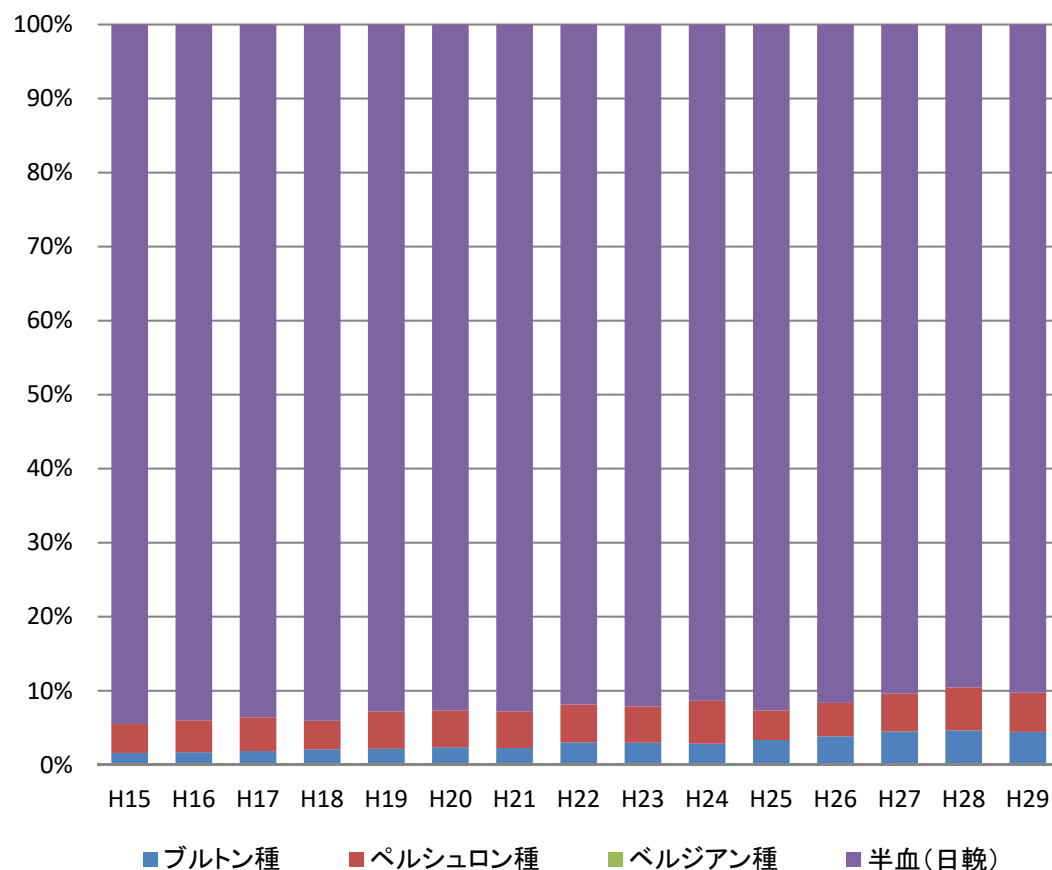


ブルトン種
体高が160cm程度、体重
700～1,000kgの大型馬。
幅、後躯が充実。

【参考】農用馬（重種馬）の品種別登録状況

- 純粋種（ブルトン種、ペルシュロン種）の登録割合は約1割。大半は半血種（日本輓系種、ブルトン、ペルシュロン、ベルジアンのかげ合せ）が占めている。

品種別血統登録頭数割合の推移



資料：(公社)日本馬事協会

○品種(雑種強勢を利用した生産体系)



ペルシュロン種
【大型(体高)】



ブルトン種
【幅。後躯の充実】

雑種強勢の利用



【大型で幅のある馬】

交雑化(交雑種×交雑種)が進むと...

雑種強勢効果の低下

純粋種の交配による
雑種強勢効果の維持・再活性化

(3) 競走用馬（軽種馬）の飼養状況

- 飼養頭数は、近年増加傾向にあり、平成29年は約42,000頭。
- 主産地は北海道。〔約80%は日高地方〕
- 輸入頭数は、近年250頭前後で推移。

(単位:頭)

年次	繁殖供用種馬		育成馬		競走馬		国内合計	輸入			
	種雄馬 ①	種付雌馬 ②	当歳馬 ③	1歳 ④	中央競馬 ⑤	地方競馬 ⑥		繁殖用	妊娠馬	競走用	合計
平成5年	767	17,191	12,591	12,230	6,418	23,582	72,779	44	68	215	327
10年	506	13,169	10,241	10,322	6,612	23,270	64,120	82	66	345	493
15年	389	11,499	8,774	8,599	7,802	19,025	56,088	40	96	226	362
20年	284	10,268	7,378	7,156	8,096	12,117	45,299	31	85	157	273
25年	230	9,322	6,843	6,495	7,926	10,551	41,367	34	59	115	208
26年	230	9,272	6,904	6,501	7,846	10,041	40,794	48	70	118	236
27年	227	9,404	6,857	6,559	7,890	9,930	40,867	70	37	146	253
28年	234	9,492	6,907	6,514	7,977	9,996	41,120	68	51	129	248
29年	252	9,653	7,088	6,562	8,025	10,379	41,959	61	51	153	265

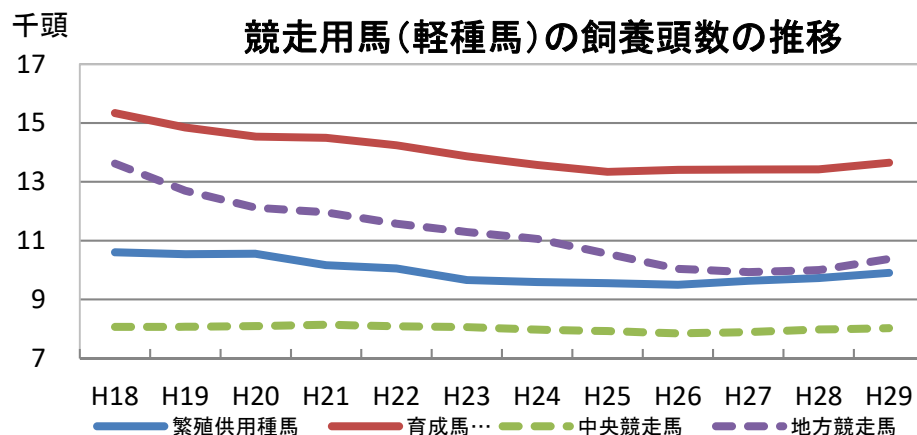
資料:1.①②③は、(公財)ジャパン・スタッドブック・インターナショナル・(公社)日本軽種馬協会「軽種馬統計」

2.④は、前年の生産頭数(当歳馬)に0.95を乗じた推定頭数

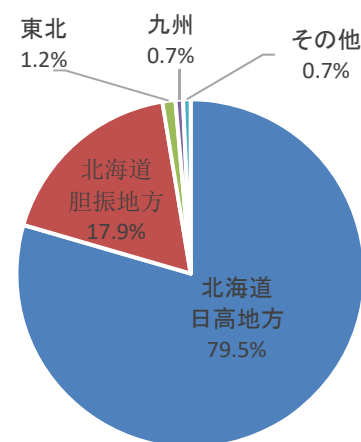
3.⑤は、日本中央競馬会調べで、各年の翌年の1月1日現在の在籍馬頭数

4.⑥は、地方競馬全国協会「登録馬及び登録馬に関する統計資料」で、各年末の馬登録頭数

5.輸入頭数は、(繁殖用)畜産振興課調べ、(競走用・妊娠馬)(公財)ジャパン・スタッドブック・インターナショナル



競走用馬(軽種馬)の 地域別出生頭数(当歳馬)割合 (H29)



サラブレッド種
体高平均160～162cm
18世紀に競走用としてイギリスで
品種改良された軽種馬。乗馬目的
にも使用される。

(4) 乗用馬の飼養状況

- 飼養頭数は、平成26・27年まで増加傾向であったが、その後減少傾向。
- 乗系馬の主産地は、北海道(73%)、岩手県(16%)。
- 輸入頭数は、近年200頭前後で推移。主な輸入国はベルギー、ドイツなど。

<乗系馬>

(単位:頭)

年次	繁殖供用種馬		育成馬		総飼養頭数	輸入頭数
	種雄馬	種付雌馬	当歳馬	1歳		
平成5年	13	141	74	59	9,797	170
10年	25	269	101	136	11,646	165
15年	56	348	187	194	13,755	131
20年	32	287	127	135	15,829	197
25年	61	298	172	142		204
26年	66	328	174	163		173
27年	66	336	169	165		218
28年	74	294	142	161		221
29年	69	271	169	135		186

<小格馬>

(単位:頭)

年次	繁殖供用種馬		育成馬		総飼養頭数	輸入頭数
	種雄馬	種付雌馬	当歳馬	1歳馬		
平成5年	121	1,092	433	1,394	—	15
10年	123	875	637	742	—	22
15年	132	694	432	304	1,610	17
20年	88	484	321	285	1,178	17
25年	72	221	166	165	624	0
26年	77	255	182	158	672	0
27年	76	279	141	173	669	0
28年	77	258	156	134	625	3
29年	78	236	135	148	597	6

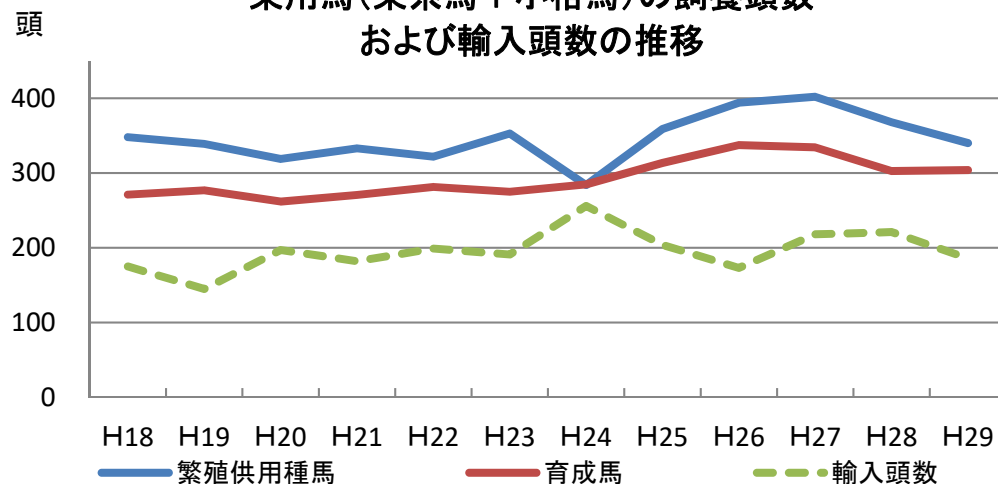
資料:1.繁殖供用種馬、当歳馬、小格馬については(公社)日本馬事協会調べ

2.育成馬の1歳馬は、前年の生産頭数(当歳馬)に0.95を乗じた推定頭数

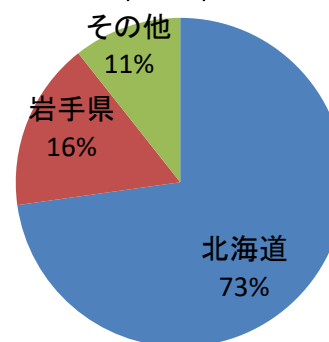
3.乗用馬の総飼養頭数は、(公社)中央畜産会「家畜改良関係資料」。H23以降はデータなし。

4.輸入頭数は、畜産振興課調べ

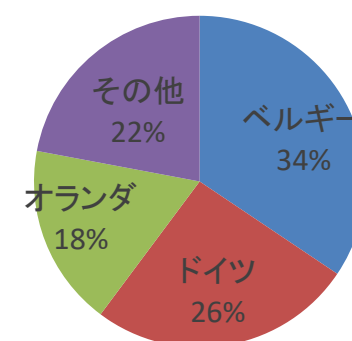
乗用馬(乗系馬+小格馬)の飼養頭数
および輸入頭数の推移



内国産乗用馬(乗系馬)の
地域別出生頭数割合
(H29)



乗用馬(乗系馬)の
主な輸入国の割合
(H29)



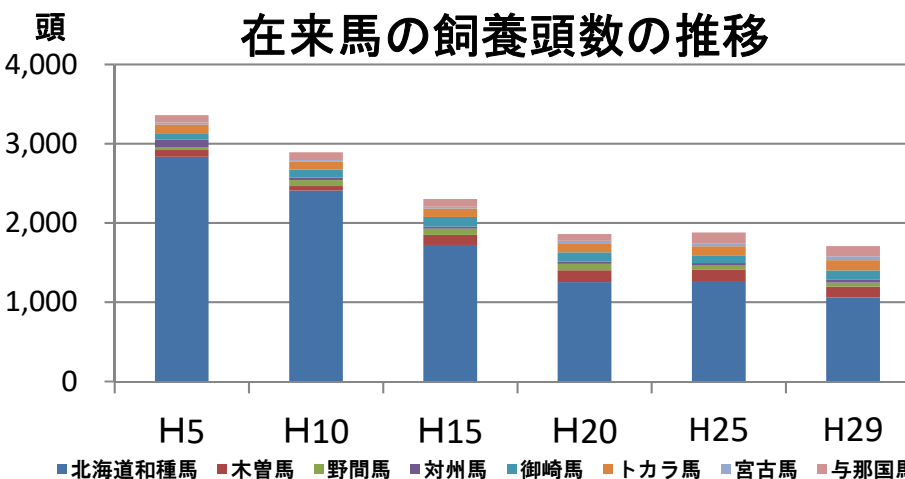
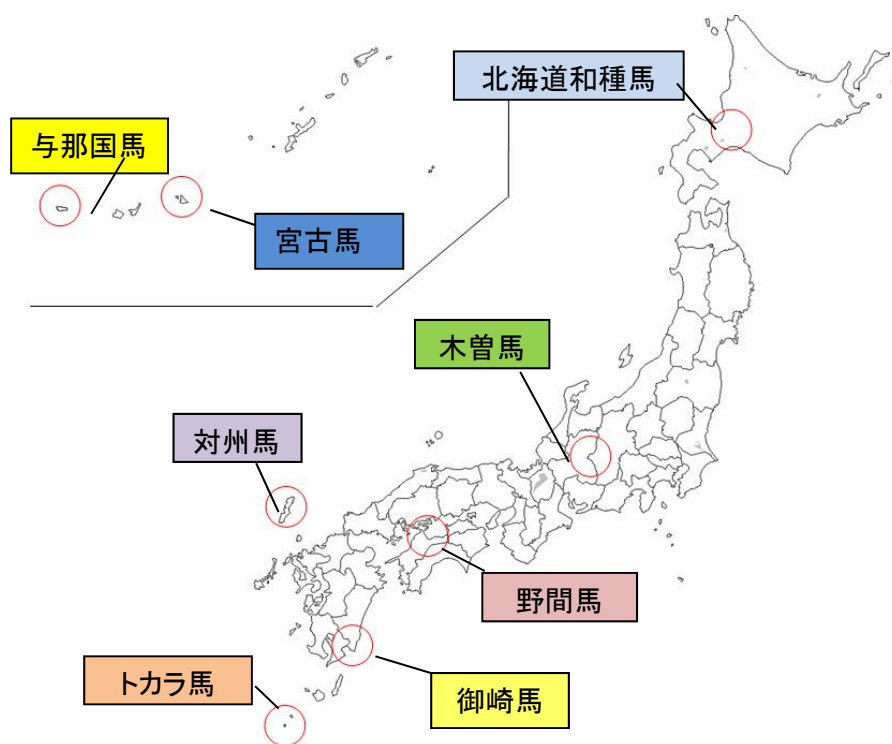
(5) 日本在来馬の飼養状況

○ 8品種ともほぼ横ばいか微減傾向。

(単位:頭)

	北海道和種	木曽馬	野間馬	対州馬	御崎馬	トカラ馬	宮古馬	与那国馬	計
飼養地域	北海道	長野県 (木曽地域)	愛媛県 (今治市)	長崎県 (対馬)	宮崎県 (都井岬)	鹿児島県 (トカラ列島)	沖縄県 (宮古群島)	沖縄県 (与那国)	
飼養頭数	1,059	138	51	40	112	130	48	130	1,708

資料:(公社)日本馬事協会調べ(H29)(各保存団体からの報告による)。なお、保存地域以外の飼養頭数を除く。



北海道和種馬



宮古馬

(6) 登録頭数の推移

- 競走用馬（軽種馬）
登録頭数は、飼養頭数の減少に伴い減少していたが、27年度以降増加傾向。
- 農用馬（重種馬）
登録頭数は、飼養頭数の減少に伴い減少傾向。
- 乗用馬
登録頭数は、平成15年度に新たに登録品種を追加したこと（日本スポーツホース種等）により一時期増加したが、近年は横ばい。

（単位：頭）

年次	軽種馬（輸入馬を除く）			農用馬			乗用馬（小格馬を含む）		
	血統登録	繁殖登録		血統登録	繁殖登録		血統登録	繁殖登録	
		雄	雌		雄	雌		雄	雌
平成5年	12,628	76	1,686	5,994	77	1,262	219	5	33
10年	10,317	46	1,249	4,392	57	743	163	7	35
15年	8,461	53	1,192	3,097	63	692	196	8	31
20年	7,247	28	1,058	2,116	34	296	553	67	333
25年	6,700	21	964	1,382	24	224	478	27	86
26年	6,785	28	1,033	1,282	41	220	427	23	88
27年	6,735	34	938	1,209	17	197	406	32	84
28年	6,822	35	951	1,167	28	226	395	36	90
29年	6,966	33	1,056	1,151	36	216	413	31	86

資料：競走用馬（軽種馬）は（公財）ジャパン・スタッドブック・インターナショナル、農用馬（重種馬）・乗用馬は、（公社）日本馬事協会が登録団体

(7) 馬肉関係

- 我が国における馬肉の供給量はここ5年はほぼ横ばいである中、国内生産量はと畜頭数の減少に伴い減少傾向。
- 馬肉の主産地は、九州地方が全体のほぼ半数、東北地方が約4割を占める。
- 供給量を確保するために、輸入馬肉の価格はほぼ一定であったことなどを背景に、輸入量が増加傾向。

(単位:頭、トン)

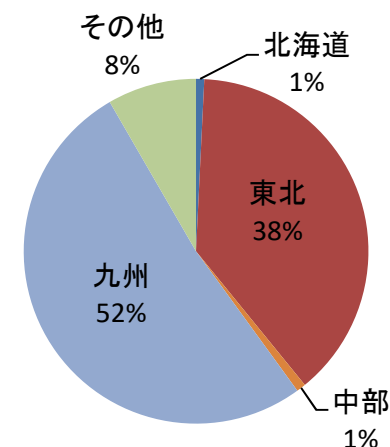
年次	と畜頭数	国内生産量 (A)	輸入量 (枝肉換算) (B)	供給量 (A + B)
平成5年	17,348	6,314	41,600	47,908
10年	20,422	7,830	19,894	27,724
15年	19,039	7,459	10,769	18,228
20年	15,003	6,053	8,276	14,329
25年	13,592	5,465	6,828	12,293
26年	13,474	5,379	6,890	12,269
27年	12,466	5,113	7,719	12,832
28年	10,240	3,670	8,036	11,706
29年	9,807	3,916	8,401	12,317

資料: 1.と畜頭数、国内生産量は農林水産省統計部「畜産物流通統計」

2.輸入量は財務省関税局「日本貿易月表」を枝肉換算(部分肉重量÷0.65)

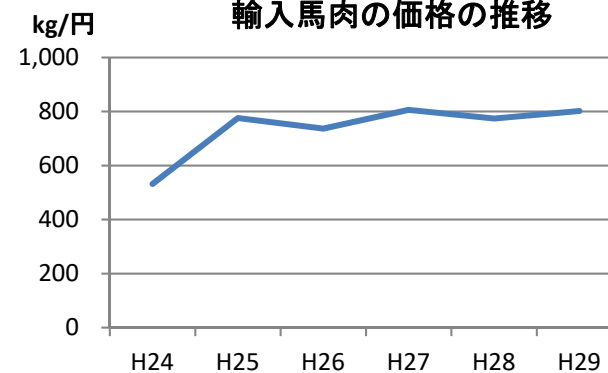


馬肉の地域別生産量割合(H29)



資料: 農林水産省統計部「畜産物流通統計」

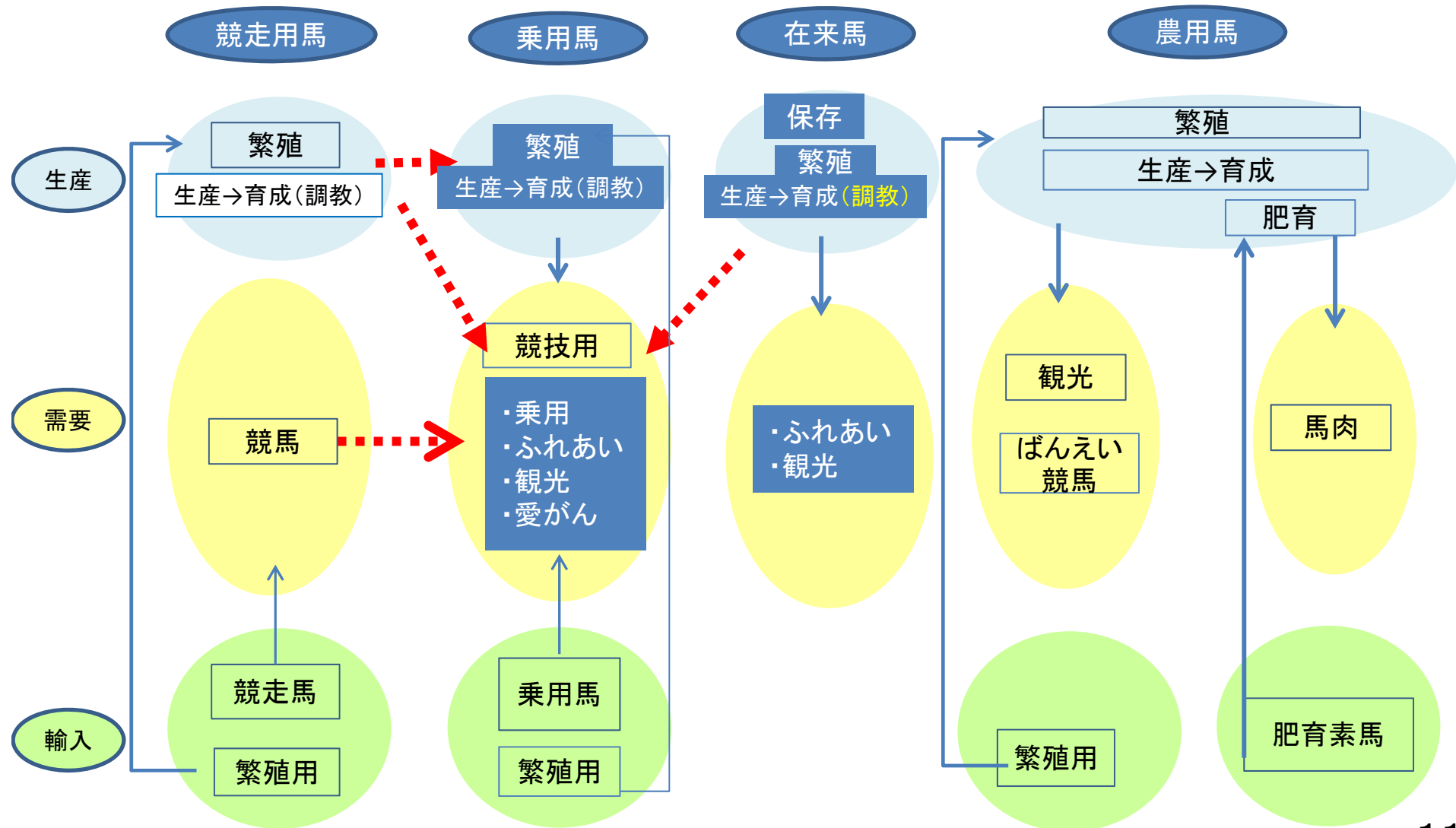
輸入馬肉の価格の推移



資料: 財務省関税局「日本貿易月表」

(8) 馬の流通概要

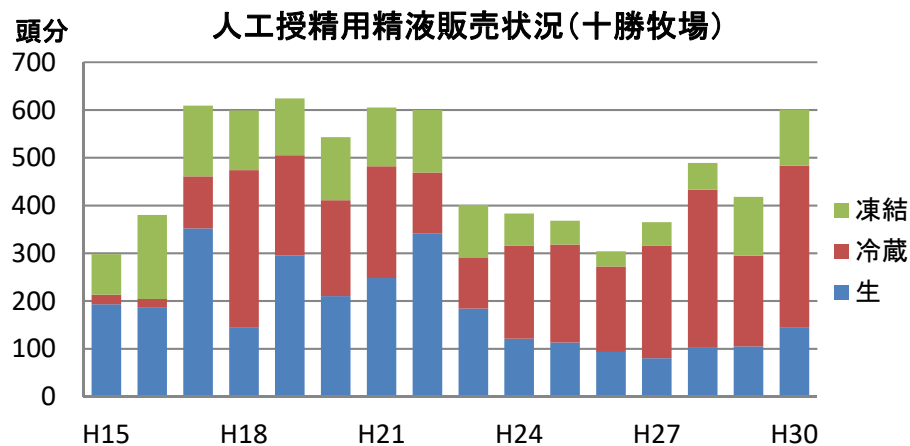
- 競走用から乗用への転用は、年間3,000頭程度。
- 在来馬を調教し、乗用として活用するなど、多様な利活用が行われている。



3. 改良をめぐる情勢

(1) 馬の人工授精の状況について

- 馬の凍結精液による人工授精技術は普及が進んでいない。平成28年種付産駒の登録頭数のうち人工授精による産駒は、農用馬（重種馬）では107頭で全体の9%程度、乗用馬では22頭で全体の10%程度。
- 技術者の養成、効率的な凍結精液作成技術や長期利用可能な冷蔵精液の検討が課題。
- 平成29年2月、フランスとの精液証明書発行条件が締結され、フランスからの凍結精液の国内流通が可能となったところ。



※(独)家畜改良センター十勝牧場実績



擬牝台による採精



繁殖技術研修会

血統登録頭数のうち人工授精産駒頭数とその割合

種付け年		H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
農用馬 (重種馬)	血統登録頭数	2,116	1,906	1,710	1,624	1,483	1,382	1,282	1,209	1,167	1,151
	人工授精産駒頭数	100	85	82	87	94	91	95	83	92	107
	割合	4.7%	4.5%	4.8%	5.4%	6.3%	6.6%	7.4%	6.9%	7.9%	9.3%
乗用馬	血統登録頭数	229	246	226	236	218	248	210	197	219	229
	人工授精産駒頭数	21	23	24	22	30	23	27	24	24	22
	割合	9.2%	9.3%	10.6%	9.3%	13.8%	9.3%	12.9%	12.2%	11.0%	9.6%

※(公社)日本馬事協会調べ

人工授精実施雌馬頭数

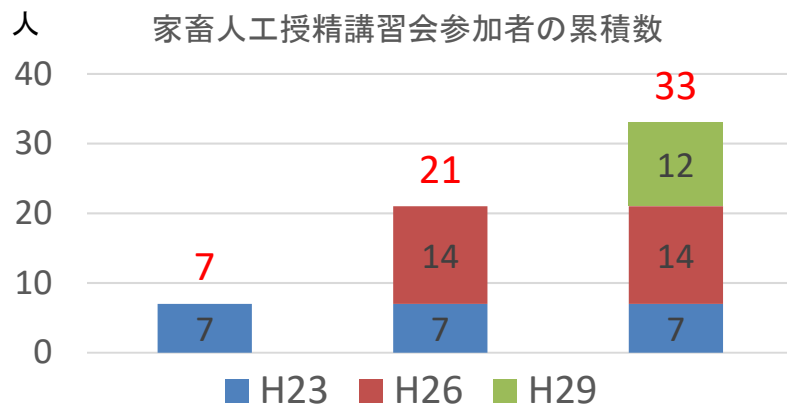
	北海道 (農用馬)	遠野 (乗用馬)	山梨 (乗用馬)	熊本 (農用馬)	宮崎 (農用馬)
H17	622	83	0	13	-
H18	747	63	0	15	51
H19	799	92	8	16	46
H20	707	100	1	5	46
H21	729	58	9	43	42
H22	721	51	2	34	17
H23	471	72	0	34	34
H24	485	53	0	29	34
H25	486	57	0	30	29
H26	419	66	0	31	16
H27	449	57	0	33	10
H28	509	50	0	38	12
H29	532	37	0	37	10

※(公社)日本馬事協会調べ

【参考】馬の人工授精の状況について（技術講習会開催など）

- 家畜人工授精講習会（馬）は3年に1回開催。過去3回で30名程度が受講。
- 獣医師を対象とした繁殖技術講習会を毎年度開催。
- 人工授精用の冷蔵精液は、採精後24～36時間以内の雌畜への注入が推奨されており、利用可能地域が限定的。効率的な生産、更なる長期利用が可能となる技術開発が必要。

家畜人工授精講習会



※(独)家畜改良センター十勝牧場実績

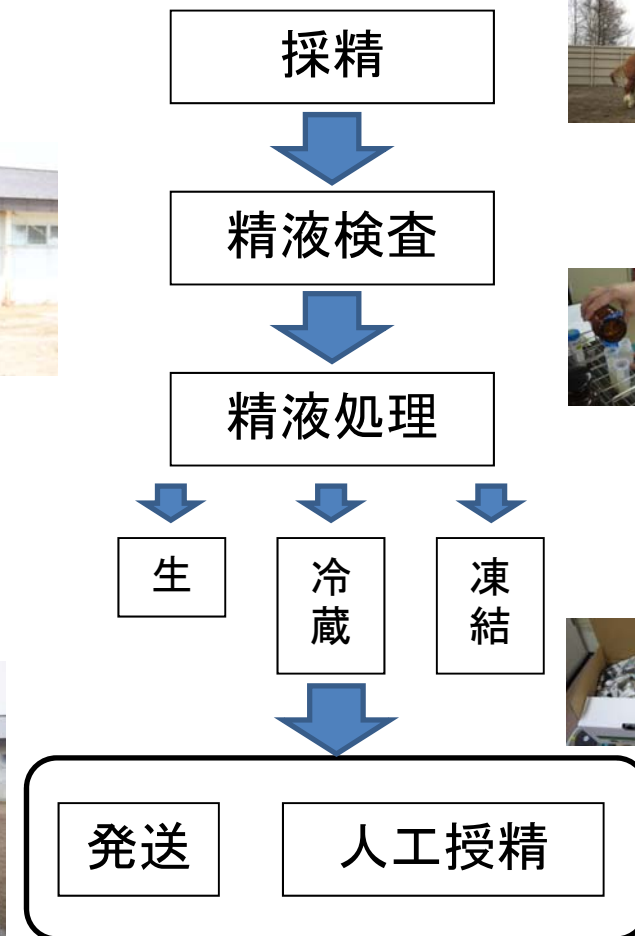
繁殖技術研修会

NOSAI 馬繁殖効率向上技術研修会

開催年度	人数	個別研修人数
H29	9	0
H30	9	2
H31	9	0

※(独)家畜改良センター十勝牧場実績

人工授精用精液の処理の流れ



(2) 農用馬（重種馬）・乗用馬の能力評価

- 競走用馬や乗用馬では、血統情報・競馬・馬術競技会の成績から一定の能力を評価。それ以外の馬については能力評価手法は確立されていない。
- 一方、客観的な能力評価手法については、海外では乗用馬や農用馬においてBLUP等に基づく能力評価、計画交配による改良が行われており、我が国においてもBLUP法アニマルモデルを活用し能力評価が可能なが示唆されている。

<取組状況>

馬能力向上推進事業〔(公社)日本馬事協会・JRA事業〕〔平成22～24年度〕

平成24年度に馬事関連団体が個別に保有・管理する血統登録情報、競走馬時代の競走成績、馬術競技成績、飼養管理情報について一元化したシステムを構築し、公開。

〔農用馬〕体尺データ（家畜改良センター十勝牧場）をもとにした体型評価

〔乗用馬〕競技会成績をもとにした評価

→ 能力評価のための計算式（プロトタイプ）を作成。

馬能力検定方法確立推進事業

〔(公社)日本馬事協会・JRA事業〕（平成25～27年度）

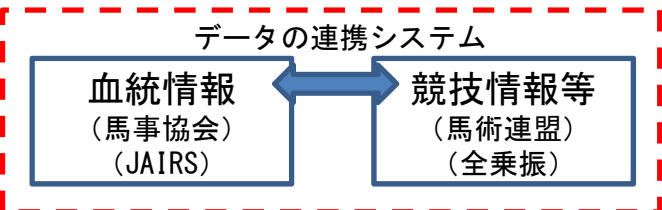
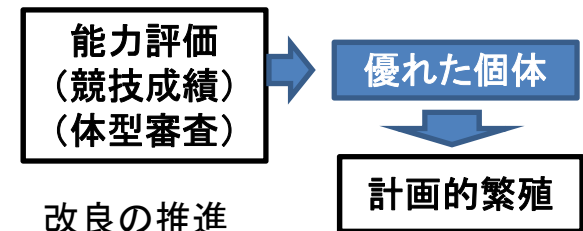
フィールドでの能力検定方法の指針の策定を目標とした事業。海外で実施されている能力評価方法について情報収集し、我が国の生産実態にあった農用馬の体型や、乗用馬の体型・パフォーマンスの評価方法（線形評価形質の選定等）について検討した。

〔例〕イタリアの農用馬はけん引能力と産肉性を改良目標とし、7ヵ月齢以下の子馬から得た体型情報（11形質について5ポイントの線形スコア付け）を選抜に活用。能力評価情報は公表。

馬能力体系化等推進事業

〔(公社)日本馬事協会・JRA事業〕〔平成28～30年度〕（事業実施中）

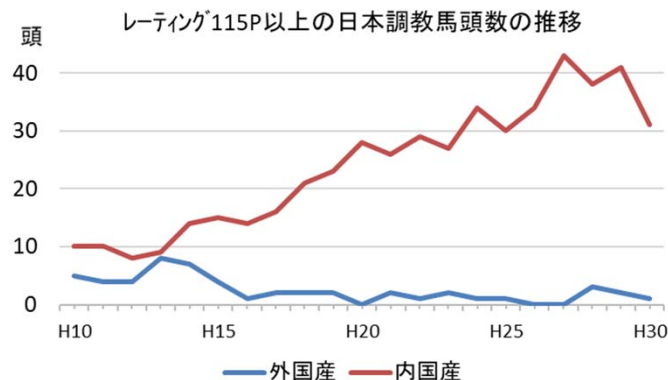
前年度までの事業で策定した能力評価システムのデータ収集方法及びデータ強化を行い、産肉能力及び牽引能力についての新たな能力評価手法を検討し体系化することを目的とする事業。



【参考】競走用馬（軽種馬）の能力評価

- 「ロンジン・ワールド・ベスト・レースホース・ランキング」(※)における「レーティング115ポンド（国際G1レース出場レベル）」以上の馬（2018年：計334頭）のうち、我が国で調教された馬の頭数は、32頭（世界全体の10%）存在。
- 人気種牡馬に種付けが集中したことによる血統の偏りが危惧されることから、新しい系統の種牡馬の導入など対策が図られているところ。

(※) I F H A（国際競馬統括機関連盟）〔本部：パリ〕は、世界の主要なレースの成績に基づき、競走用馬の評価を実施し、その結果をランキング化して公表している（参考URL：<http://www.jra.go.jp/datafile/ranking/wrank/index.html>）



ロンジンワールドベストレースホースランキング
レーティング115ポンド以上馬の調教国別構成割合(2018年度)

国名	割合	頭数
米国	22%	74
英国	16%	55
オーストラリア	15%	51
日本	10%	32
香港	7%	25
アイルランド	7%	25
南アフリカ	7%	22
フランス	5%	17
その他	10%	33
計		334

資料：日本中央競馬会（掲載実頭数は332頭（英国とUAEの両国で調教され、重複して掲載された馬が2頭いたため））

内国産種牡馬種付頭数上位10位(2018年)

種牡馬名	父馬名	父の父馬名	計
ロードカナロア	キングカメハメハ	kingmambo	294
ドウラメンテ	キングカメハメハ	Kingmambo	290
モーリス	スクリーンヒーロー	グラスワンダー(USA)	245
ルーラーシップ	キングカメハメハ	Kingmambo	243
エピファネイア	シンボリクリスエス(USA)	Kris S.	220
ディープインパクト	サンデーサイレンス(USA)	Halo	197
コパノリツキー	ゴールドアリュール	サンデーサイレンス(USA)	194
シルバーステート	ディープインパクト	サンデーサイレンス(USA)	191
ホッコータルマエ	キングカメハメハ	Kingmambo	182
ハーツクライ	サンデーサイレンス(USA)	Halo	174

資料：(公社)日本軽種馬協会「JBBA NEWS」

【参考】スポーツホースの能力評価

- スポーツホースとは、馬術競技を目的として育種改良されている馬のことをいい、品種ではなく馬のタイプを示す。
- 海外では、スポーツホースを含む各馬競走馬以外の馬の品種改良は、登録協会が能力検定を実施し、検定で合格した種雄馬および繁殖雌馬のみを登録するという方法で行われている。

ヨーロッパの主な乗用馬生産国の検定方法と検定頭数

国名	若馬(主に3, 4歳)				種雄馬		
	ステーション	フィールド	競技会	検定頭数	ステーション	フィールド	検定日数
ベルギー	—	—	○	1000	—	30	1
デンマーク	○	○	—	700	20	—	30-70
フランス	—	—	○	3,600	—	230-700	フィールド:1、競技会365
ドイツ	○	○	○	3,600	300	—	30-100
アイルランド	○	—	○	475	5	70	ステーション:84、競技会1年
オランダ	○	○	—	3,400	80	—	70
スウェーデン	—	○	—	1,300	40	20	8

資料: Hippophile No.58(2014),18-25「ヨーロッパにおけるスポーツホースの育種改良の現状」

- ステーション方式: 特定の場所(検定ステーション)に若馬(3, 4歳)を集めて、一定期間プロフェッショナルが一定の調教を施し、その結果を検定成績とする方法。
- フィールド方式 : 全国各地に検定員が出向き、その地域の若馬を集めて1日程度で検定する方法。
- 競技会方式 : 同年齢の若馬の競技会を開催し、その時の競技成績を利用する方法。

27年9月、(一社)遠野市畜産公社馬の里での国内の能力評価方法の検討



体型審査(頸の角度や背線など)の様子



飛節(後望)の特徴を捉えている様子

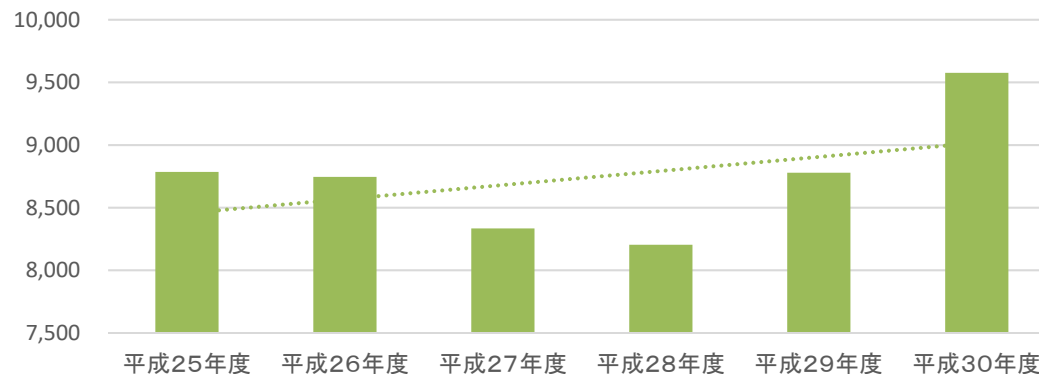


障害を飛ぶ様子から飛越能力に関する項目を評価

(3) 乗用馬のニーズについて

- 乗馬クラブでの繋養頭数は近年増加傾向で推移。競走馬からの乗用への転用などの内国産馬は約8割をしめている。
- 日本古来の祭事等馬文化の継承に加え、安らぎや癒し効果に着目した福祉・教育・観光目的等の多様な活用が各地域でおこなわれている。

乗馬クラブにおける繋養頭数(全乗振登録)

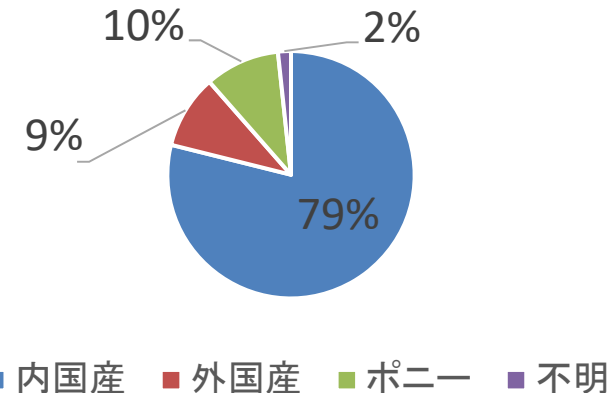


乗馬クラブ数	272	275	272	275	273	273
--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

資料:1(公社)全国乗馬倶楽部振興協会調べ

2全乗振登録クラブにて繋養されている頭数(クラブ所有馬・自馬・半自馬含む)

乗用馬登録頭数の内訳



資料:1(公社)全国乗馬倶楽部振興協会調べ

2全乗振登録クラブ(H30)の乗用馬登録頭数の割合

<地方行政機関等が主導した乗馬関連事業例等>

- ・ 愛媛県今治市主催 → 「ちびっこ・のまうま祭り」
- ・ 長崎県対馬市主催 → 「対馬・馬跳ばせ」
- ・ 沖縄県・沖縄市・(公財)沖縄こどもの国主催
→ 「ンマハラセー」

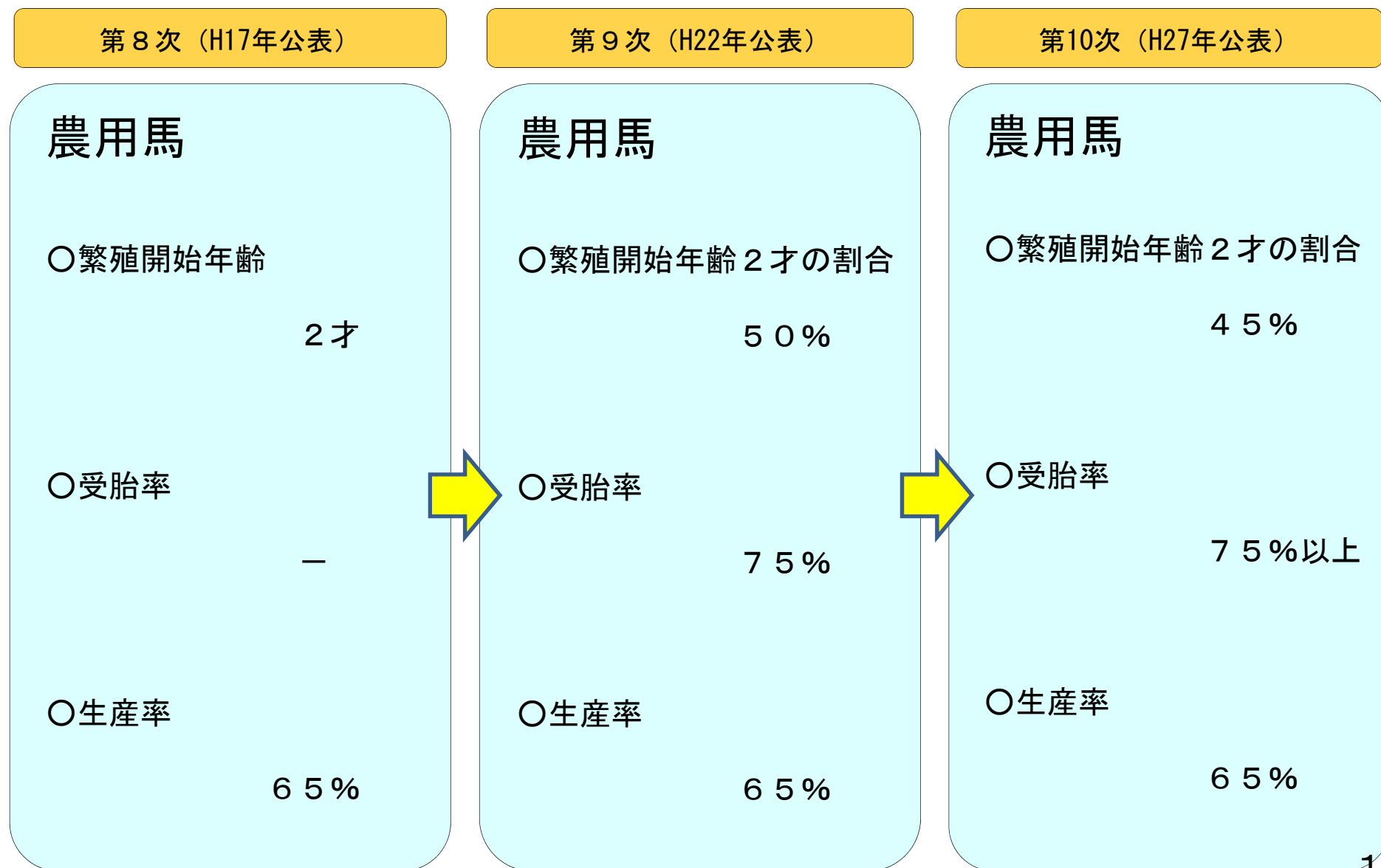
(公社)全国乗馬倶楽部振興協会調べ

<活用の多様化>

- 競技馬(障害、馬場、総合、エンデュランス)
- 乗馬用(一般用、レッスン用)
- レジャー・娯楽用(トレッキング、子供用(小格馬))
- ホースセラピー
- 教育活動

4. 馬の改良増殖目標のうち数値目標の検証

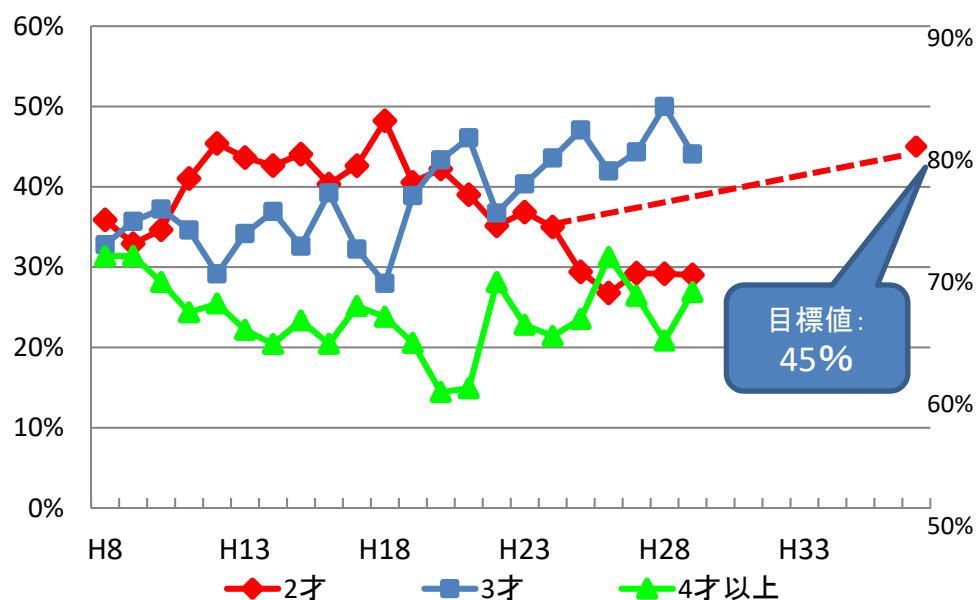
(1) 数値目標の変遷



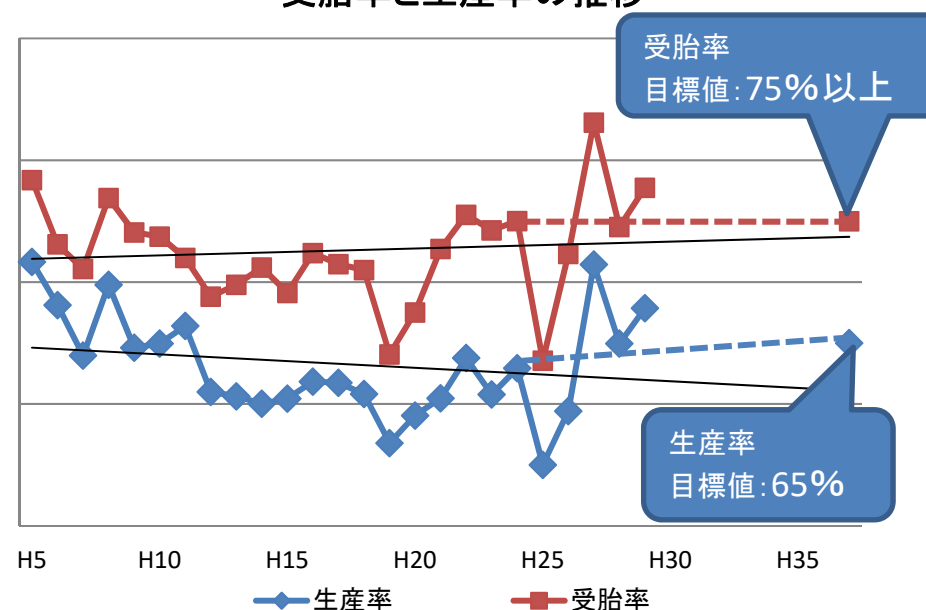
(2) 現行の目標（第10次家畜改良増殖目標）に対する進捗状況

- 初回種付け年齢割合のうち2才種付けの割合は、近年全体の30%程度で推移。
- 受胎率、生産率ともに増減を繰り返している。また、近年は流死産率が高まっている傾向にあり、受胎率と生産率の乖離が大きくなっている。

初回種付け年齢割合の推移



受胎率と生産率の推移



流死産率の推移

種付け年	H5	H10	H15	H20	H25	H26	H27	H28	H29
流死産率	7.7%	11.2%	7.2%	11.4%	12.2%	20.0%	15.4%	13.1%	11.7%

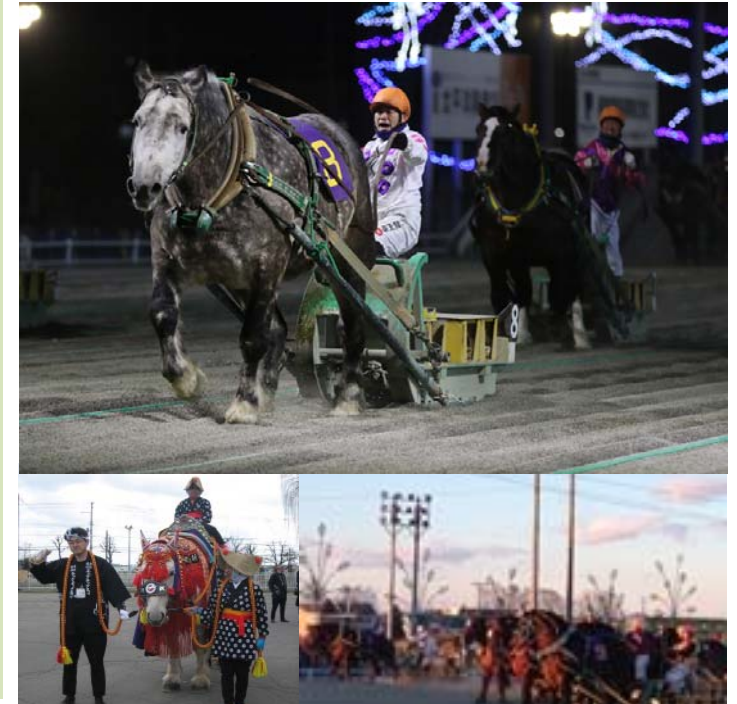
5. 優良事例（その1）

○ 世界に唯一のばんえい競馬による地域振興 【北海道帯広市】

◇ 概要

35年以上の歴史をもつ世界で唯一の「ひき馬」競馬として知られる。長年、帯広市を含む北海道内の自治体が共同で運営してきたが、19年度から帯広市が単独で運営。25年度には「薄暮開催」を冬季初で導入するなどし、売り上げを伸ばした。また、25年度には映画「銀の匙」でも登場するなど、地方競馬としての「ばんえい競馬」は、映画やドラマの題材としても取り上げられている。

また、競馬場内には十勝産の野菜や加工品などを扱う店舗が並ぶ複合施設「とかちむら」が平成22年にオープン。観光交流拠点として、イベントなども行われている。競馬場内では施設を活用してバックヤードツアーや朝調教ツアー、馬のふれあい広場などの体験メニューが企画されるなど、馬を通じた地域振興が図られている。



◇ 活用している地域資源

古くから主に農耕馬などとして利用されてきた「ばん馬」の活用。

◇ 地域活性化のポイント

ばんえい競馬をメインに、公営競技だけでない帯広・十勝を国内外に発信する観光交流拠点として地域資源を活用することによる地域活性化。

◇ 今後の展開方向

地域の行事や学校・福祉施設等への囑託馬の派遣等を通じ、ばん馬やばんえい競馬への市民理解の醸成に努めるとともに、農用馬の生産振興及び競争馬の確保策や収入増加策に取組み、観光資源としての活用を進める。

5. 優良事例（その2）

○ 国際競技に対応できる馬の生産、地域おこし 【岩手県遠野市】

◇ 概要

遠野市は、日本一の乗用馬の生産地の確保を図るとともに遠野郷の賑わいを一層盛り上げるため、「馬事振興」、「教育・福祉事業」、「観光交流事業」との連携を推進。拠点として平成10年に「遠野馬の里」が日本中央競馬会、岩手県競馬組合、岩手県などの支援を受け整備された。

「遠野馬の里」では場内に採精施設を持ち、人工授精も行われており、我が国の乗用馬の生産拠点となっている。

乗用馬生産のほか、一般の乗用馬を預かり調教・休養する預託業務や、馬とふれあう機会を提供するため、施設内での乗馬教室やふれあい体験等実施。馬を活用した地域振興を行っている。



◇ 活用している地域資源

南部曲がり家様式や、木材の馬搬技術等の遠野固有の知恵を生み出してきた馬事全般を遠野市の地域資源と位置付け活用。

◇ 地域活性化のポイント

「遠野市馬事振興ビジョン（第1次、第2次）」（H24～29）を策定し一定の成果を収めた。現在は「第3次（2021～2025）」の取組みに係る準備期間として、「遠野市馬事振興計画」（2018～2020）を策定し、これまでの馬事振興ビジョン（「馬事振興」、「教育・福祉事業」、「観光交流事業」との連携を通じた活動）を継承しつつ、人材の育成や確保、施設の長寿命化を図る。

◇ 今後の展開方向

地元の人材育成（人工授精技術・育成調教技術に関する講習会の開催）や馬事文化の観光資源化の推進等の取組を通じて馬事振興を図る。

5. 優良事例（その3）

○ 馬を活用した教育・研究・社会貢献活動 【北海道帯広市 帯広畜産大学】

◇ 概要

「帯広畜産大学」は、馬の生産や活用に深い関わりをもつ地域にあり、古くから馬の獣医学や畜産領域の教育、研究活動を行っている大学である。

共同獣医学課程及び畜産科学課程があり、各学年250名ほどの学生を有しているが、大学の新入学生全員が、乗馬や馬の管理を実際に体験し、馬と人との関係について理解する機会が設けられている。

また、馬を効果的に教育研究に活用するために、馬介在活動室を設置し、障がい者への乗馬体験事業（社会貢献活動）、障がい者乗馬に関わる教職員及び学生への技術指導（教育活動）、障がい者乗用馬の生産に関する研究（研究活動）等を展開し、その取り組み「人と馬の絆による教育・研究・社会貢献活動」が平成30年度文部科学大臣表彰を受賞している。



◇ 活用している地域資源
農用馬、軽種馬、小格馬など馬全般。

◇ 地域活性化のポイント
ばん馬の主産地という地域性を背景として、豊富な馬資源を活用し、馬診療技術の向上や市民・学生等に対して馬への理解を深める。

◇ 今後の展開方向
教育活動、研究活動を通じた継続的、発展的な支援活動の展開。

5. 優良事例（その4）

○ 在来馬を活用した観光資源、ホースセラピー等への取り組み 【長野県木曽町】

◇ 概要

日本在来馬の一種である「木曽馬」は、一部の馬が長野県天然記念物に指定されている。

長野県木曽町開田高原にある「木曽馬の里・木曽馬乗馬センター」では、木曽馬の種の保存に取り組むが、ただ飼養するのではなく、生産馬を乗馬や馬車などに使えるよう調教することで、観光資源としても活用している。

また、木曽馬の温和な性格を活かし、ホースセラピーの実施にも取り組んでいる。

活動は生体の保存にとどまらず、地元小学生を対象にした、木曽馬を用いた「馬耕」体験を実施するなど、馬文化の継承にも取り組んでいる。



◇ 活用している地域資源

日本在来馬の一種である木曽馬の利用。

◇ 地域活性化のポイント

地域資源である在来馬（木曽馬）を活用し、観光資源のみならず、ホースセラピーへの活用や、馬耕への取り組みによる馬事文化の継承など、多岐にわたって馬を活用した活動を展開。

◇ 今後の展開方向

木曽馬特有の形質と多様性の維持、飼育・調教者の確保、木曽馬の利活用の明確化を図り、種の保存を継続する。